

主 題：わたしは世の光です**聖書箇所：ヨハネの福音書 8章12節**

今朝はヨハネの福音書8：12、イエス様はこう言われました。「わたしは、世の光です。」——このみことばから一緒に学んでいきたいと思っています。

もう50年以上前の話、私が大学1年の時のことです。山岳部に入った私は、人生初めての冬山登山を経験することになりました。4年生の先輩ひとりと新入部員の1年生ふたり、3人のパーティーで冬の北海道の日高山脈に行くことになりました。私は北海道生まれですから雪や寒さには慣れていましたが、それでも人生初めての冬山ですからすごい緊張感がありました。すべてが初めての経験でしたから本当に苦闘の連続でした。そしてやっとの思いで目的とする山に登ることができましたが、本心はもうただただ早く山を降りたい、その思いでいっぱいでした。本当に疲れきったからで、凍って雪の積もった川をスキーで下っていました。夜の7時頃、辺りは真っ暗でした。そのような状況の中で、あることが私を元気付けてくれました。今でも私ははっきりとその時の様子を覚えています。それは、私たち3人の足元を、そして下っていく先の所を明るく照らす月の光でした。その月の光は、白い雪に反射して周りを明るく照らし出してくれました。からだは本当にくたくたでしたが、その月の光の明るさは、本当に私の心を元気付けてくれたのです。あ一足が動いてるなあ……生きてるなあ……あ一早くゆっくり眠たいなあ……そんな思いだけが私のうちにありましたが、あの50年前の冬山の経験は今でも忘れる事はありません。そしてそれは、あの月の明るいことでした。

イエス様はヨハネ8：12で「わたしは、世の光です。」と言われました。光は、いつでもどこでも暗やみを明るく照らすものです。私たちはそのことを日常の経験からよく知っています。きょうは皆さんと一緒に、このイエス様の言われた「わたしは、世の光です。」の真理を学んでいきたいと思っています。ヨハネ8：12をお読みします。

ヨハネ8：12

「イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」」

1. 背景

イエス様がこのように言われた時の背景を少し考えてみます。聖書を見ると、7：53－8：11までは[]でくくられ、挿入句としてここに置かれています。この挿入句は8：15に続くものと考えられますので、7：52から8：12へと飛んで読み続けることが可能です。12節「イエスはまた彼らに語って言われた。」その「彼ら」は7章で登場している「ユダヤの人々」のことです。そして、イエス様がこのことばを語られた場所は、8：20を見ると「宮」の「献金箱のある所」とあります。そこは神殿の婦人の庭でした。また、語られた時は、7章の記事から「仮庵の祭りの時」でした。イスラエルでは収穫祭が後に「仮庵の祭り」と呼ばれるようになりました。この祭りは、イスラエルの民が荒野を旅したときの仮住まいを覚えるため、またカナンでの祝福を感謝するための祭りでした。そしてこの祭りの時には、婦人の庭に置かれた4つの金の大きな燭台に、その期間中毎晩ずっと火が灯されていました。その照らす強い光はエルサレムの町の隅々にまで届いたと言われています。この強い光は、かつてイスラエルの民がモーセに率いられて荒野を旅した時、行く手を照らしてイスラエルの民を導いた、あの「火の柱」を思い出させました。出エジプト13：21－22にこう書かれています。「【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進ませた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。：22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかつ

た。」ですから、この時イエス様が「わたしは、世の光です。」と言われたこの自己啓示のことばを、多くのイスラエルの民はよく理解することができました。

2. 「わたしは世の光です」 I am the light of the world

「わたしは、世の光です。」このことばも、イエス様が、ご自分がどのような者であるのかを啓示することばでした。先ほども述べましたが、荒野を旅するイスラエルの民を導いたあの火の柱のようにあなたがたを明るく照らす光であること、そして、わたしはあなたがたの神である、そういう自己啓示だったのです。きょう私たちはこのヨハネ8章から学んでいますが、ヨハネ1章には、イエス様の先駆けとして来たバプテスマのヨハネのことが記されています。ヨハネ1：6-9をお読みします。「:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。」今読んだ箇所からお分りのように、バプテスマのヨハネは光ではなく、来られようとしている光をあかしするために来た者でした。そしてバプテスマのヨハネがあかしするその方こそ、「すべての人を照らすまことの光」であり、この世を照らす「まことの光」でした。

光は暗やみを照らし、そこにあるものを明らかにします。暗やみでは見えなかったものを見えるようにしてくれるのです。また光には、暗やみがもたらす痛みまた苦しみを癒す力があります。その痛みや痛みから私たちを解放してくれる力が、光にはあるのです。まことの光は、私たちの心を照らす光としてこの世に来られたのです。私たちを暗やみの世界から、その痛みから救うために、また解放するために来られたのです。

このヨハネの福音書では、「光」ということばは、「イエス・キリストの愛」を表すことばとして、また「その愛が罪の暗やみの中にいる人々に開放をもたらす唯一のもの」として示されています。この福音書の12：46-47にこう書かれてあります。「:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。:47…わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」またイザヤ9：2にはこう書かれてあります。「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。」

3. 「わたしは世の光です。わたしに従う者は」

イエス様は続けて「わたしに従う者は、…」と述べられました。皆さん、「わたしに従う者」とはどのような者たちのことでしょうか？ここで使われている「従う」ということばですが、“能動態の現在形”で書かれています。それはどういう意味か？それは、「自分から従い続ける」ということです。一時だけ従うのでも、途中まで従うのでもありません。「従うことをやめない」ということです。それは、戦場で戦う兵士の姿に見て取ることができます。戦場では、兵士は指揮官に従わなければなりません。当然です。もし従わなければ、その戦いで勝利を得る事はできないかもしれません。これを私たちに置き換えれば、私たちが兵士であり、イエス・キリストが指揮官なのです。またこうも言うことができます。それは、奴隷が主人に絶対的に服従することを意味しています。私たちは奴隷です。そして私たちの主人は主イエス・キリストです。私たちは主イエス・キリストに従う者です。このことにつきましてウイリアム・バークレーという神学者は書物の中であることばを書いていました。「キリストに従う者とは、からだと精神と霊とを捧げて主に服従する者のことである。従う者となるには、まず光に歩まなければならない。独りで歩けばどうしてもつまずいたり、暗中摸索したりせざるをえない。(中略)独りで歩けば、どうしても私たちはあやまった方向に進んでしまう。なぜなら、わたしたちは信頼のおける人生の地図をもっていないからである。地上の道を行くには天井の知恵が必要なのである。確かなガイドと正確な地図をもつ者が、必ず安全に目的地に到達する者である。イエス・キリストがそのガイドであり、イエスだけが人生の地図を握っている。キリストに従うこと、それは人生を安全に進

み、そして後についに栄光に入ることである。」と。「わたしに従う者」とは、イエス・キリストの救いを受け入れて、イエス・キリストを主人として、その主人に服従する者のことです。「【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。」詩篇27：1のことばです。

4. 従う者への祝福

イエス様はその後こう言われました。「わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」従う者たちの祝福、それがその後に記されています。

① 「決してやみの中を歩むことがなく」

「決してやみの中を歩むことがなく」先週も学んでいた時に二重否定の箇所が出てきましたが、それは「決して～がない」ということです。それは、「絶対にそのようなことがない」という意味を持っています。この「やみ」ということばですが、神の創造の始まりの時から「光」と「やみ」は対比されていました。出エジプト10：21-23をお開きください。「：21 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸べ、やみがエジプトの地の上に来て、やみにさわれるほどにせよ。」：22 モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプト全土は三日間真っ暗やみとなった。：23 三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかった。しかしイスラエル人の住む所には光があった。」この記事は、主がエジプトに下したさばきの9番目が「やみ」であったことを述べています。

この「やみ」は、私たち人間のさまざまな状態を言い表しています。一つは「霊的無知」もう一つは「悪」三つ目は「さばき」四つ目は「苦しみ」です。

- a. 霊的無知—イザヤ9：2、ヨハネ1：5、Iヨハネ2：8
- b. 悪—箴言4：19、ルカ11：34-35、エペソ5：8、11
- c. さばき—マタイ22：13、IIペテロ2：4、17
- d. 苦しみ—イザヤ8：22、13：10、詩篇23：4

パウロはエペソ5：8で「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」と述べています。これは後ほどもう一度学びます。私たち救われた者は、再びやみの中を罪に支配されて人生を歩み続けることは、絶対にありません。なぜなら、「決してやみの中を歩むことがなく」とみことばは教えています。皆さん、私たちは主イエス・キリストの御支配の下に移され、今は「光の子ども」となったのです。その証拠に、私たちのうちには聖霊が住まわれています。パウロはそのことをIコリント6：19でこう述べています。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」そのことを知っているでしょ？とパウロは問いかけるのです。ですからパウロは私たちに、御霊に従って歩むようと、ガラテヤ5：16-26でその勧めをしています。

② 「いのちの光を持つのです」

「いのちの光を持つのです。」とイエス様は言われました。この「いのち」また「光」ということばは、ヨハネの福音書の中で最も特徴的なことばとして用いられています。1：4「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。」ことばなる方は「いのち」なる方であり、その方は人間の心を映し出す「光」なのです。私たちが自分のうちに潜む罪を自覚できるのは、イエス・キリストの「いのちの光」によって私たちの罪が照らし出されるからです。1：5には「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」と書かれてあります。神のかたちに似せて造られた私たち人間は、神に対して不従順の罪を犯し、神との交わりを失い、やみの中を歩む者となりました。しかし、やみの力がどんなに強力なものであっても、この「いのちの光」なる方は、この「やみ」を打ち破る力、またその権威を持ったお方です。この光のなる方は、いのちの源なる方であり、その方は私たちに永遠のいのちを与えてくださる

のです。そして私たちは、このいのちの光なる方が私たちのうちに住まれ、私たちはこの方とともに人生を送ることができるのです。

5. 光が来られた目的

この「世の光」が来られた目的をもう一度確認したいと思います。ヨハネ 12 : 46-47 をもう一度お読みします。「:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。:47 だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」やみを照らす光としてイエス・キリストは来られました。そして、イエス・キリストを信じる者すべてが、やみの中に住み続けることがないために来られたのです。46節に「とどまる」という動詞が使われています。この「とどまる」の意味は、「そのままの状態でそこにいる」ということです。ですから、イエス様は「わたしを信じる者はだれも、そのような状態でそのままそこにいることはない。」と言われたわけです。

また47節では、はっきりと「世を救うためにイエス・キリストは来られた。」と記されてあります。パウロはコロサイ 1 : 13 でこう言います。「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」私たちは、以前は罪に支配され、罪の奴隷として生き、神の怒りを受けるべきそのような者でした。パウロはこの事実を、エペソ 2 : 1-3 で私たちに教えています。そのような者の行く先は永遠の死であり、永遠のさばきでした。しかし、そのような者であった私たちが主のすばらしい恵みによって救われたことを、パウロは続く 2 : 4-5 でこう述べています。

「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちがキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」神の恵みは私たちにとって測りがたいものです。そして今もこのやみを照らす光は、生きて働いているのです。ヨハネ 1 : 5 「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」またペテロもこう述べています。I ペテロ 2 : 9 「…あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方…」と。皆さん、私たちは今、驚くべき光の中、恵みによって主の祝福の中にいるのです。

6. 光の子どもとしての歩み

さて、そのような驚くべき光の中にいる私たち、その私たちの歩みはどうあるべきなのでしょう？パウロはエペソ 5 章でそのことを教えています。5 : 8-10 をお読みします。「【:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。:9 ——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです——:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」

① 8節

8節を見ていただくと「以前は暗やみでした」と書かれています。あなたがたは以前は暗やみの中にいました、とパウロは言っていない。あなたがたは、暗やみそのものであった、ということです。暗やみの中に住んでいた者ではなくて、「あなたがた自身が、その暗やみであった」とパウロは強調しています。それはこういうことです。「私たちはまさに罪人そのものであった」ということです。

しかし「今は、主にあって、光となりました。」皆さん、皆さんが主の中にいるのなら、皆さんは光の中におり、光は皆さんの中におられるのです。皆さんの中におられる光なる方の性質が皆さんに与えられているのです。

そしてそのあと「光の子どもらしく歩みなさい。」とパウロは言います。2017年度版の聖書には「らしく」のところが「光の子どもとして」「として」ということばに書き換えられています。「光の子どもとして歩みなさい。」この「歩みなさい」動詞の自制は“現在形の命令”です。それは、「光の子どもとしての人生を歩み続けなさい」ということであり、「光の子どもとして主に忠実に歩み続けなさい」ということです。

② 9節

9節は——線が引いてあります。この節は挿入句としてここに置かれているということです。9節の中は、光の子どもとして実際の生活の中で実らせる「実」について書かれています。「光の結ぶ実」の「実」ということばは“カルポス”と言うギリシャ語なのですが、ここは単数です。三つの実のことでなくて単数ですから、一つの実の中に「善意」「正義」「真実」が含まれているということです。皆さんはガラテヤ5：22に「御霊の実」と書かれてあるところをよくご存じだと思います。この「御霊の実」の「実」ということばも、ここで使われているのと同じ“カルポス”ということばが使われていて、その「御霊の実」も単数形です。ということは、あの箇所では、一つの「御霊の実」の中に、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」このものすべてが含まれているということです。

9節はその「実」の中身について三つ書かれています。簡単にその三つのことを見ます。

- a. 「善意」—それは他人のことを思う心です。情け深い心や行いのことです。
- b. 「正義」—これは神の正しさ、聖さを求める心、またその行いです。
- c. 「真実」—偽りとか偽善に対する誠実、という意味を持つことば。エペソ4：25「ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。」

③ 10節

光の子どもとして歩むために大切なことは10節に書かれています。私が使っている第二版には「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」と書いてありますが、2017年度版には「何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。」と書かれています。Try to discernと英語では書かれているのですが、その英語のことばの意味するところは「識別する」とか「見分ける」ということです。

では皆さん、何を吟味するのでしょうか？また何を吟味しなければいけないのでしょうか？それは、実際の生活における一つ一つの私たちの行いのことです。それは、私たちの生き方のことです。私たちは自分を喜ばせることを選択し、実践することではなくて、主が喜ばれることを選択し、実践することです。私たちキリスト者の実際の生活での基準は、ただ一つです。それは、「主が喜ばれることは何」かを求めることです。パウロはローマ12：2でこう述べています。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

皆さんは今、光に照らされた道を歩んでいますか？もしそうであるならば、それはすばらしいことです。その光は、私たちに祝福を与えてくださる光です。ですから、その光が照らすその道を歩み続けてください。

皆さんの中に、先が見えない暗やみの中に今も自分を置いておられる方はいませんか？暗やみは私たちに困難や痛みを与えるものです。しかしもっと悲惨なことは、その暗やみの行先は、永遠の滅びです。今暗やみの中に自分を置いている皆さん、光の照らす祝福の所へ出てきませんか？もし皆さんがそう願うなら、いのちの光なるイエス・キリストは、あなたのうちにわざを成してくださいませ。

このメッセージの最後にヨハネ6：39-40を読んで終わりたいと思います。「:39 わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。:40 事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」